
白い花

りょく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い花

【著者名】

りょく

【ノード】

N11920

【あらすじ】

機動戦士ガンダムSEED。

2ndが終わつての話。シンキラです。視点は基本シン目線。

戦争終結後、お互ひの正体を知らないまま会つ一人。
切ないストーリーです。ハッピーエンドが好きな方はご注意を。

全7話。

(1) はじまり

メサイヤが燃えていく・・・。

俺が願つてい戦いを終わらす事は叶つた・・。

けれど、これで本当に世界は平和になるのだろうか?

俺は・・・そうは思わない。

以前にオープで思ったことは、今でも俺の中では変わらない。

花が綺麗に咲いても・・。

人はまた花を踏みにじる・・。

どんなに戦いが終わり、平和になつたって言つても所詮それは平和面なだけだ・・。

それに・・・俺の家族が帰つてくることはない。

戦いは一先ず終結を迎えた。俺達も上部同士が結んだ平和同盟で軍も平和の復旧活動へ駆り出されている。

初めはどんな処罰も覚悟の上だつたけれど、俺達バイロットには特に大きなお咎めは無かつた。その代わりにあれから1ヶ月も経つたがプラントには帰れない。まあ色々と事後処理などがあるからだ。遭遇だつて外へ出るときに監視が付くだけで特に困ることはない。だけど俺にとつては生まれた故郷と言つても家族を殺された場所・・・こんな場所には居たくない。目を閉じればあの光景が脳裏に浮かぶだけだ・・・。

「オープなんて・・・」

ミネルバは最前線の戦いでだいぶ破損していたことと、武力の解除を示すためにミネルバもプラントには帰れない状態だった。

「シン、今日の分終わった?」

「・・ルナ、いやまだ機体の方を見に行くから」

「うう、じゃまた後でね」

「・・ここ注文と違うんだけど」

「えっと・・ちょっと待つて下さい」

整備士のクセにこんなこともすぐに出来ないのかと舌打ちしながら、さつきの整備士が呼んで来たのは深く帽子を被つた人物だった。

「ええっと・・これでどう?」

俺が手渡した変更点を書いた用紙をほんの数分静かに見てから、パソコンのキーをはじき出した。目にも止まらない速度でプログラム変更することができるなんて、レイくらいだと思つてたけど。。。

「平気そうです・・」

「そう、よかつた」

そつ言つて帽子を取ると、栗色の少し長めの髪とアメジストの瞳をした綺麗な人だった。最初は女人の人かと思ったが、声やしぐさで男の人だとわかる。年齢は自分よりは少し上の様だが、容姿とは違いどこか落ち着いた・・大人な人の様に思えた。

「何かあつたらいつでも言つて下さい」

「あ・・」

それから何度も見かけることがあって、俺は何故かその人が気になつていた。

「最近よくここに来てるって聞いたわよ?前はあんなに嫌そつだつたのに」

「別に今だつて嫌に決まつてるだる」

確かに以前はどうしてもの用が無い限りここには近づかなかつたが・・少し図星され俺は慌てて出よつとすると・・。

「シン」

メサイヤが落ちて、全ての戦闘行為が一時終結を迎えた。ミネルバも艦長が死亡し、事実上ザフトの惨敗だつた。。

戦争が終わつて、何度かアークエンジェルのクルーに会うこともあつた。けど、俺達を倒した一応敵で・・オーブの艦隊なわけだから俺が好きになるわけないし、気を許せるわけもない。。アークエンジェル内で色々と話とか言わされたけど、俺は一刻も早くここを離れたかった。

「・・・アスラン」

いつもの様にアークエンジェルに来ていた俺は、聞き覚えのある声に足を止める。

「シン、お前と話を・・」

「・・・俺は話なんてないです」

俺の冷たい答えにアスランは端整な顔を少し悲しげにゆがませる。

「いや、あの後お前達がどうしてるか気になつっていた」

「どうしてあんたが俺達の事を・・気にする必要があるんです?俺達はあんた達に倒されんだ!!」

思わずかつとなつて、声を荒げた俺に通りかかった人が怪訝そうに振り向く。

「シン・・」

「あんたに何が解るつていうんだよ!!」

まだ何かを言おうとしたアスランに思わず手が伸び、殴りうとしてしまつた時・・。

アスランとは会いたくなつた。意見が違つし、なにより俺達を裏切つた奴だ。

その時誰かが止める声が聞こえたと同時に俺が殴つて倒れた人を見

て固まつたが、俺に殴られるハズだったアスランはその人物を慌てて覗き込む。

「キラ！！」

「・・・大丈夫だよ」

アスランにキラと呼ばれたのはこの間の人だと気づき俺は焦つたが、キラは赤くなつた頬をさすりながら慌てるともなく立ち上がる。

「アスラン、喧嘩はダメだよ・・・僕は大丈夫だから」

「だが・・・」

その時緊急呼び出しの音が鳴り、アスランはきちんと救護室に行くよう念押しをしながら慌てて走つて行つた。

「・・・それじゃ行こつか」

「え？」

「君も怪我してる」

半ば強引に連れられ向かつた救護室は人がいなくて・・・。

「あ・・・俺します」

先に手早く手当てをされ、俺はお返しじゃないけど・・・殴った張本人だし・・・そうキラに言うと素直に椅子に座つてくれた。

「あの・・・大丈夫ですか？」

キラの唇の端は青く少し血が滲んでいた。

「平気だよ」

につこりと微笑まれると顔が赤くなる・・・。

「喧嘩は・・・ダメだよ」

「・・・わかつてます・・・」

他の人に言われるのはむかついてイライラするのに、何故かこの人の言う言葉は素直に胸に落ちる。

「あつ」

やつと絆創膏を貼り終えたと思つと、急に声を出したキラに驚いて視線を向ける。

「君、どつかで会つたことあるような気がしてたんだけど・・・前に会つたよね？」

「・・・え？」

「ほり、オープの海岸沿いで」

その言葉に俺の記憶も蘇つて来た、白い花が咲き乱れる場所に彼はいたんだ・・。

「慰靈碑の所にいた・・人つてあんただつたんだ・・・・・

「うん、こんな所で会えるなんてすごいよね」

キラは嬉しそうにそう言ったが俺は複雑な気持ちだった。それがどんな感じかと言われたら説明は出来ないけど・・なんとなく嬉しくは無かつた。

「・・そうですね・・・それじゃ俺帰ります・・・あの名前、俺は

シン・アスカです」

「僕はキラだよ、キラ・ヤマトヒロシくね」

それが俺とキラの出会いだった。

>>>Next

(2) チョコレート

「シンってば……」

「え、何だよ？」

不機嫌そうに覗きこんできたのは同じ赤服のルナマリア。

「この間から上の空じゃない、何かあったの？」

「いや、別に……」

一応そう俺は答えたがルナはまだ疑問を持つてるみたいで……。

「まだアークエンジェルに通ってるみたいね……」

「またそれかよ……好きで行つてるわけじゃないって前にも言つただろ?」

一応そう答える。けれど確かにルナの言つ通りだ。けど今だつてアーケンジェルが好きになつたわけじゃない。

今でもオープは嫌いだ。戦争が終決した少しづつだけど俺のただオープを憎むだけの感情は変化しているのは事実であつても。

「……あ」

今日も用事で地球軍の月基地に俺は來ていた。

地球軍つとつても臨戦体制は解かれているから、ピリピリとした緊張感はあまり感じられない。

けどこの戦闘にプラントは負け側だからザフト軍の服を着ていれば嫌でも視線が向く。

イラつく中、俺の視線の先には・・キラがいた。

あれから何度か偶然会つて、何度か話をした。話といつても大した内容でも無くて、ほとんど天氣や食事の話とかの話。それでも俺は何故か彼が気になつてゐるのは事実で……。

向ひはまだ俺には気づいていなくて、俺は声をかけようか少し戸

惑いながらも近づいていくと彼は誰かといることに気づいた。

最初はちょうど視界には入らない位置にいたためだろう。キラが誰と一緒にいるのか興味があつて近づくと、その一緒にいる人物を見て俺は立ち止まつた。

そこにいたのは・・現オーブの代表である、カガリ・コラ・アスハ・。

「・・・しかし」

「カガリなら大丈夫だよ、ね？」

内容までは聞き取れなかつたが、キラとカガリの関係が親しいことは誰の目から見ても解ることだつた・・。

俺はその光景を見て、憎んでいるオーブのアスハとキラが知り合いだと言う事にショックを受けていた。もちろんアークエンジエルがオーブに所属していることは知つてゐる・・。そして次にキラの元に現れた人物にも驚いた・・。

「キラ」

「ラクス・・どうしたの？」

ピンク色の髪をなびかせ、柔らかな微笑みで2人の下へいくラクス・クライン。

「こちらに用で参りましたら、アスランがあなた方お2人もこちらに来ていると言つていたので・・元気そうでなによりですわ」

「ラクスも元気そうだね」

「はい、そうですわカガリさん、さつそくなのですがお話したいことがあります」

「私にか?解つた、ではキラ行こ!」

「キラには後でアスランと一緒にお話しします、先にオーブの代表にお話しなければいけないのです・・」

「そうか・・」

「それではこちらに、キラまた後でお会いしましょうね」

「うん、じゃあ少ししたらアスランと一緒に行くから

そのキラの言葉にラクスとカガリは笑みで返し3人は別れた。2人がいなくなるとキラは少し瞳を伏せ、前髪をかきあげた。そのしぐさは何といふか・・とても綺麗だと思った。けどその表情は自分が記憶している彼の表情とは違つた。どこか辛そうな・・・どこか影のある感じ・・。

そこにいるのに、どこか違う場所に1人たたずんでいるかのような・・・そんな・・・。

「・・あれ、シン君?」

その様子を見ていた俺にキラは気がつき、さつきの表情は消えていつもの微笑みの表情に戻つた。

「・・あつ・・どうも」

「またお仕事? 大変だね」

「キラさんこそ、忙しんじゃ・・・」

「うーん、戦争が終わってもまだする」とはいっぱいあるもんね・・

立ち話もなんだからといふことでキラは自分の部屋へと案内してくれた。

キラの部屋は必要なもの以外何もない、よく言えばすつきつ悪く言えば少し寂しい部屋だった。

「ごめんね、何もない部屋で・・あつこの間ねラクスに美味しいお茶の葉もらつたんだ~」

そう言って、キラは楽しそうにお茶をいれてくれた。

「どうぞ」

温かいカップからは湯気がのぼり、果実のさわやかな香りと甘い香りの紅茶だった。

「どうかな?」

「・・美味しいです」

そう俺が答えるとぱあっと表情が明るくなりキラは嬉しそうに微笑んだ。

「あの・・セツキオープのアスハとラクスさんと話してましたよね？知り合いなんですか？」

「うん、僕の大切な友人・・かな、最近は2人も忙しそうで・・アスランも忙しいみたいだし」

オープの代表のカガリ、プラントの歌姫ラクス、そしてアスラン・ザラ。誰もが知っているこの3人を友人と呼べるこのキラという人物にシンは少し訝しげに思つた。

「アスランとも仲いいんですか・・？」

「うん、アスランとは小さい頃からの友達で、このトリイをくれたのもアスランなんだ」

『トリイ？』

いつもキラの周りを飛んだり、今は肩の上に止まっているロボット鳥。この鳥をキラはとても大切にしていることは会つて短い俺にも感じることだつた。

「・・あ・・そう言えば、キラさんはどうしてオープに？戦争中は何をしてたんですか？」

「・・僕？・・・・・」

キラは俺の質問に困つた表情を向けたため、俺は聞いてはいけなかつたことだと気づいたが・・。

「オープは縁つて言うのかな・・戦争中は僕は人を・・・」

「キラ！」

その時部屋に入ってきたのはアスランだった、アスランは俺を見るなり驚いた表情をしたがすぐにいつもの表情に戻る。

「どうしたのアスラン？」

「カガリがお前が来るのが遅いから探して来いつていいうから・・何
かあつたんじゃないかって思つて」

「ははは、アスラン心配しすぎだつて僕もいつまでも子供じゃない
んだから」

「・・さあ行くぞ、カガリ達が待つてる」

「あつうん・・アスランすぐ行くから先行つて」

「え？・・・ああ解つた、急げよ」

「何で行かないんだ？皆待つてるんだろ？」

「だつて今は君と話をしてるんだし、3人がいれば僕がいかなくて
も話しさまとまるよ・・それに僕にはもう何も出来ないし」

「え・・？」

「じゃあ後一杯飲んだら行くことにするから、ね？」

そういうながらもキラはその後30分経つてから俺と別れた。その
別れ際・・。

「シン君これあげる

「・・・チョコレート？」

「いつも眉間に皺寄つてるみたいだし、疲れてるんじゃないかなつ
て・・そのチョコレート美味しいから食べてみてね」

キラが去つた後、俺はあまり甘いものは好きではないけど・・貰つ
たチョコレートを頬張ると、何故かとても美味しく感じた。

(3) 困惑

キラに会つてから俺の頭の中はキラの事が気になつてしかたなかつた。何故気になるのか自分でも解らないから余計に気になる・・・。こんなのはじめてで・・・。

「お姉ちゃん、こっちこっち~」

俺とルナは修理の為預けていた機体を取りに、オープに来ていた。宇宙でも修理できないわけじゃないのだが、プラントにはまだ事後処理で帰れないし、ミネルバもミネルバ自身が損傷が酷く修理が必要でクルーの多くも傷を負つている為、オープが機体の修理を行つてくれることになった。

「メイン、ちょっと待つてって」

メイリンも戦闘中はオープ側に付く形にはなつっていたものの、戦後はプラントに戻れることになつていた。

「修理場はこっち、一応ザフトの機体だから大きな整備場では見付かることダメだから・・・」

メイリンの案内についていくと、地下におりる長いエレベーターに乗る。エレベーターが着き扉が開くと、俺達の機体は完璧に整備されていた。

「うわあ、少し時間かかったけどあれだけの損傷が全然解らないね」

「・・でも、プログラム確認してみないと・・」

「そうね」

俺とルナは自分の機体に乗り込みどこか異常がないか確認をした。

「あのーもし問題があれば言つてください」

機体の外から整備士達の声が聞こえる。

「あっここってどうなってるの？」

ルナがその声の主に声をかけて、何か色々と話している。

「シンの方は異常ない？」

「ああ、俺の方は特に……」

「すみません、ちょっと俺には解らないんで……えっと」

機体の確認を済ませ機体から降りると、ルナと話していた整備士が一人の青年を連れてきた。

「……うん、多分こじじゃないかな？」

青年はすぐにプログラムを見て、次々にすばやく速さでプログラムを変更していく……。

「これでどう？」

「……うん、大丈夫みたい、ありがと！」

ルナの答えにその青年が振り向くと、それは……やっぱり……。

「……キラさん？」

「シン君？あれこんな所で何してるの？」

「……あ……機体を修理してもらつてたから、取りに……」

「機体？」

俺の後ろにある機体を見たキラの表情が変わったことに俺は気づいた。

「……これ君の……機体？」

「はい……そうですけど」

「これに乗つてたのつて君だつたんだ……」

そうポツリと呟いたキラは、悲しい顔をしたままその場を離れてしまつ……。

「キラさん……」

「・・・シン君・・・」

「あの……あの機体に何か……あれはザフト軍所属のディステイニーーーー・」

「知ってる・・あの機体に乗つてたのが君だつたなんて・・・・・キラは悲しい表情なのに、目を俺から背けることはしなかつた・・・

「僕達もう会わない方がいいかもしないね・・・」

「…………それで!?」

どういう意味か解らなかつた、ただキラの言葉を俺は受け入れる事

「どういふ意味はございません。何うござ
は出来ないだけで……。

卷之二

キラは走り出そうとしたが、それよりも早く俺はキラの腕を掴んだ。

「可で……俺、可か」た? 俺が幾本乗つざかう?

「・・・シン君が悪いわけじゃないから」

「た、たら!!」

キラはそう言って、俺の腕を振りま

井元はそう言って俺の腕を振りほどき走ってしまった
この状況が飲み込めず、俺はキラを追いかけることができずにその
場でしばらく立ち尽くしていた・。

「アーニー、なんだよ……」

それから数日が経つた・・特にキラとの連絡方法を知つてゐるわけでもなく・・お互いの事を・・いや、俺はキラの事は何ひとつ知らない。キラと会わない数日の間に、俺はプラントに帰れるようになつた。

「シン、ほんとに帰らないの？」

「ああ・・・」

「何で？あんなにオープから早くプラントに帰りたいって言ってたのに～」

「別に帰らないとは言つてないだり・・・ちょっと用があるから、それが終わったら帰るって」

シンは何度も問われた質問にめんべくせうに答える。本当なら修理されたミネルバと一緒にパイロットである自分も帰らなくてはいけないのでうけど、政府は忙しく少し位勝手をしても大したお咎めはないだろう。

「はあ・・・・・」

キラと会つ日は決まってたわけでも無いし、約束をしてたわけじゃないけど・・ここに来れば前までは会つことが出来ていた。だから俺はこの数日毎日オープの修理工場へ来ているけど・・・キラとはあれ以来会つてない。

「シン」

「・・・ルナ！？何で・・一緒に帰らなかつたのか？」

「うん、シンの事が気になつて・・ね」

「俺のこと？何で？」

ルナ自身も解つていて、戦争中は誰かに必要とされていなければ自分の存在、自分の意味、自分の・・・していることが解らなくなつて・・怖い。だから、シンがステラを亡くし・・ルナは尊敬していアスランがいなくなつてお互い心中穴が開いていた、だから自分達2人は一緒にいることで自分を自分としていることができた。

「何でつて・・そりや同じパイロットのシンが残るなら、私だけ帰つても・・レイももういなし」

「・・・ルナ、悪いけどルナは次の便で帰つて、俺は・・・」

「会いたい人がいる？」

ルナの答えに俺は驚いたが、ルナの方を向いて頷く。

「キラって言う人でしょ？最近よくシンここにいるものね・・・でも、シンはその人が何者か知ってるの？」

その言葉に、ルナはキラの事を少なくとも俺よりは知っているようだつた。

「何者かつて・・ルナは知ってるのか？」

「シン、あなたもよく知ってると思う・・だつてあの人は・・」

『ジリジリジリ！――』

その時、大きな警告音が鳴り響いた。

「何だ！？」

『緊急指令、オープ上空にモビルスーシー直ちに・・・・・』

「モビルスーシー！？シン、どうする気？私達の機体はもうここには無いのよ！？」

「別に戦う気は無いけど・・何が起きているのか知りたい」

「シン！？」

俺は近くにあつたオープの機体に強引に乗り込み、モビルスーシーが現れたと言つ地点に向かつた。

>>>Next

(4) 敵(かたき)の正体

「くそっ！……ビームこんな数隠れてたんだ！？！」

デュランダルの意志はまだ残り火の様に入々の心にある。やり方はどうであれ彼にも彼なりの正義があり、共に戦つた者たちがいたんだ……。

「何があつたんです？」

「攻めてきたんだ！！あれは……」

最後まで聞いてすぐにキラは顔をあげる。

「数は！？？」

「わからねえ……とにかくすごい数なんだ」

警戒音がいたるところで鳴り始め、上層部からの指示が飛ぶ。

けれどあの戦いで多くの機体が破壊、それ以降は平和の意志として新しく作る機体の数は制限。そんな中、動けるものにも限りがある。「おっおい！？」

キラは整備士達が止める声を振り切つて隅に幕を掛けられていた機体に乗り込むと、空へと舞い上がる。その空ではすでに戦いが始まつていた。

『シン、聞こえてるー？』ネルバで待機だつて命令があつたでしょ

！？』

モニターに映る映像は昔見た覚えのある光景だった……。一度と見たくない・・なのに、どうして……。

『シン！？』

ルナの通信を遮断して、俺は現状を把握するために少し距離を置いて眺めていた。

「あの機体……」

確かに一瞬、ほんの小さくだけ見覚えのある機体・・・あれはフリーダム！！

「アイツは・・・俺からすべてを奪つた奴。

「どうして戦争は終わつたんだ！！」

「俺たちの戦いはまだだ！！お前たちオープに好きなようにさせることにはいかない！！共に戦つた仲間たちの無念がお前たちに聞こえるか！！？」

その一方的な言葉にカガリとアスランは通信機材の前で息を吐く。あんな彼らみたいな人間は幾度と見てきた。その結果は2人もわかつていてる・・・戦うことでしか止められないことを。

「カガリ、俺も出る」

「アスラン・・・だが・・・」

「カガリ様！先ほど情報があつたのですが・・・あの・・・フリーダムが出撃したと・・・報告が」

「何！？パイロットは！？」

「・・・それが・・・」

歯切れの悪い言葉に誰が乗つたかは明白だつた・・・。カガリがそう気づくと同時にアスランがあわてて部屋を飛び出す。

「キラ！..」

人家の近い場所にいる機体を撃破したあと、取り囮まれ戦闘の中キラはいた。撃破した時などに人家に破片が落ちれば大惨事になるのでなるべく海へ落とすようにしていたが・・・。

「少しでも場所を移動しないと」

キラの思いとは別に、フリーダムに気がついた機体が次から次に現れる。あの頃の機体のままなら良かつたが、現在は最低限しか装備しておらず・・・このままでは・・・。

その時だつた、一瞬反応が遅れたと思うと大きな衝撃があり後方は破損・・こちらに向かつてくる機体を倒してから警告音が鳴る機体をオープからは離れた小さな島へと下ろす。

「いた！・・破損してる・・！？」

シンはフリーダムを追撃する機体を撃ち落とし、フリーダムを追いかける。

オープからは離れてはいるが、念のために他の機体の反応が無いかを確かめてから機体を降りる。

破損したフリーダムは森の中の木に紛れるように着陸してはいるが、破損部分が悪かつたのだろう動く気配はなく静けさに包まれている。俺はそんな様子を見て、右手に銃を構えたままコックピットのある場所へくる。

パイロットを助ける気なんてないが、俺の家族を奪った奴の顔を見ておきたいという衝動にかられ・・コックピットの開閉ボタンを押すと、ゆっくりと扉が開く。扉が開くと同時に濃い血の臭いが鼻をつく。

ブーブーと鳴る中、横たわっている人物を見つけ俺は銃をもう一度持ち直しヘルメットに手をかけた・・そこにいたのは・・・。

「・・・そんな・・・」

「う・・・」

顔に当たる外の光に声を上げる人物は俺が知ってる・・キラさんだつた・・。

「・・・どうして」

俺の声に、キラがゆっくりと目を開けそばに居るのが俺だと解つたからか一瞬表情が強張つたように思つた。

「・・・僕が・・僕が乗つてたんだ・・・この
「キラさん！－！」

俺はキラの言葉を途中で遮る。キラの言葉を最後まで聞きたくなかつたんだ・・。

ゆっくりとロックピットからキラを降ろし機体からは少し離れた木陰に横たえる。肩と足に深い切り傷があり服を赤く染めてる。手早く応急処置をしてからオープへ連絡を入れた。

「迎え・・すぐに来るつて・・」

「・・・そう」

俺たちの間に気まずい沈黙の時間が流れる・・キラは青白い顔をして黙つていたがポツリと小さくだがはつきり言つた。

殺さないの？

視線が俺の右手に注がれていることに気付き慌ててポケットに銃を突っ込む。

「・・・迎え来たから・・・それじゃ」

キラはまだ何か言いたそうだったが、俺はオープのヘリに見つかる前に機体に乗り込む。

頭の中は今までずっと敵だと思っていた奴がキラだったということでいっぱいだつた。

>>>Next

(5) 2つの選択

あれから数日。戦闘はアスラン達が出てひとまずは終結をしたがこんな状勢で起ることに世界は敏感だ。オープのアスハや他の幹部たちも連日忙しそうな様子が伺える。

キラについては・・・あの後、オープへ戻り入院しているそうだ・。

俺はまだ信じられなかつた・・・帰ってきてからルナにも確かめた。フリーダムに乗っていたのは誰かと。答えはやはり・・思つた通りで・・・

「私もまさかと思つたわ・・でも、以前アスランから聞いたのは確かに彼だつたから・・・」

「・・・そつか

「シン

聞き慣れた声にはじかれたように顔を向けるとアスランが立つていた。アスランについて行くと病院で、その一室の前にはアスハやラクスが待つていた。

「俺たちは中には入らないから、お前だけでいけ」

「・・・何で俺・・」

「キラが・・話があるそうだ」

キラの名前にドキリとした。一瞬入らずに帰ろうかと思つたがキラの話が気になり・・一呼吸をしてから部屋に入る。真っ白な病室にベットが一つ、その上にキラが上半身だけ起き上がつた状態でカーテンの閉まつた窓を眺めていた。ひと時沈黙が流れるがキラゆっくりこちらを振り返り言葉を切りだす。

「『めんね・・呼びだしたりなんかして・・・』

「・・・どうもりですか？話なんて・・・俺とあなたは・・・

ほんとなら家族の敵ならもつと怒りで我を忘れるんだと思った。躊躇なく殺す。あの時みたいに・・・そう思っていたのに・・・。

「僕はあの機体に乗つてた。僕自身は隠す気はないんだけど・・・政治的にはね・・・だからシン君を選んでもらおうと思つて」

「選ぶ？」

「僕を殺す・・・か、君が殺されるか」

「え・・・？」

キラの話す理由には自分は世界の表面上はいない存在として扱われ、存在の秘密を知る人が増えては困ることだつた。それを淡々と話すキラはどこか他人事を話すかのようであつた。

「だから君は選ばないといけない・・・」

「俺が選ぶつて・・・あなたが選べば！－！」

「だつて僕は君の家族の・・・敵なんでしょう？」

「そう思つてた・・・あの日からずっと彼が敵だつて。だけど・・・。

「もつと最低な人間だつたらよかつた・・・どうして…どうしてあなたなんだよ！－？」

「・・・・・ごめん」

小さく言つたキラの言葉が余計に胸に痛い。どうして・・・どうして。

「・・・選べるわけない・・・そんなの選べるわけないだろ！－！」

そのまま病室を飛び出した。呼吸がままならずむせるまで走つた・・・。

「何で・・・あなたなんだ・・・」

それから何度もキラの言葉が頭に浮かぶ。
冷静になつてみればキラの言つことは正しいのかもしない。あの

戦争でフリーダムの強さを戦いに関わった者なら知らない者はいないだろう。それなのにパイロットの正体を誰も知らないのは、どこかで情報を隠していたのかもしれない。

戦争の勝者側は恨まれることも多いし、たぶん……俺みたいに命を狙っている奴らもたくさんいるかもしれない……。

「……けど、それでも……選べるわけないよ

「……シン、大丈夫？ 食事してないって……聞いたから……あの」

「ほっといてくれ……！」

「……シン……わかつた、けどザフトからの伝言『次の帰還は明日のPM5:00』だそうよ

「帰還？」

「……つらいなら、一緒に……帰らない？ 考えといで

ルナマリアはそう言ひて、ザフトから送られてきた帰還通達の用紙を置いて部屋を出ていた。

ここを離したら、キラとは一度と会うことはないだろう……。俺はルナマリアの言葉に心が揺らぐ。

眠れないまま俺はいつのまにか朝を迎えていた。どうするか決まってない。けど、取りあえず何かをしていなくちゃ頭の中がぐるぐる回って……俺は思いつくままに部屋の私物をかばんに詰める。もともと自分の持ち物は少ない、唯一この携帯だけは戦いに行くときも持っていたけど……。

「シン！ 行くぞ！」

急に入ってきたアスランに俺は何も言えず、押し込まれるまま車に乗せられる。

「ちょっ……急に何なんだよ！？」

「キラがいなくなつたんだ、お前にも探してほしい」
「え！？ いなくなつた・・・？」

>>> N e x t

(6) 繋がる心

昨日の病室には確かにキラの姿が無くて、俺は昨日と同じ慌てて病室を飛び出す。今度はキラを探すため。
「と言つても、キラのことを俺はほとんど知らない。けど・・何となくあそこそこうな気がして・・・。」

キラと以前に会つた、慰靈の前。

そこには前と変わらず海の方を見て静かにたたずむキラの姿があつた。

「・・・キラひ・・ん」

俺の声にキラは静かにゆっくと振り向く。けど、そのまますぐ海の方へ視線を戻してしまつ。

「キラさん、病院へ帰りましよう・・傷、浅く無いはずです」
声をかけてもその場から動じないキラに、腕を掴み軽く引っ張る。

「決めたの? どうするか?」

「・・・どうも俺は選べません」

「でも、どうしても選ばなければいけなことはある・・今もその一つだと僕は思つてゐる」
「それでも・・俺は」
「じゃ僕が君を殺すとしても、君は何もしないの?」
キラはナイフを俺に向ける。だけど、殺すと言つてる相手にあなたはどんな顔をしているのか解つてゐるのだろうか・・。
「・・俺はまだ死にたくないです、けどあなたも失いたくない・・・

こんな選択は必要じゃないです・・どうしてもと詰つながら、俺はあなたの傍を離れません」

情報が漏洩しあなたに危険が及ぶなら、俺はあなたの手にかかるてもいい。けど俺は・・。

「・・・君も僕を樂にはしてくれない・・か」

「え？」

「じゃあ・・僕が君を殺すよ、僕を殺せないな」

そう言って、キラは手に持っていたナイフを持ったまま俺の方へ歩いてくる。俺は抵抗する気は無い。あなたの本心じゃなくても・・。チクリと心臓とは違う腕の部分に痛みが走ったと思つと同時にキラの手からナイフが落ちる。

「キラ！・・」

咳き込みそれを押さえようとした手から赤い血が流れ・・。そのまま倒れてしまつたキラを抱き上げて病院に戻り、夜中になつてようやくキラは目を開けた。

「僕は死ぬんだ」

俺がいるのを見てキラは静かだが、ほつきりと呟いた。

「え？死ぬって？」

「心臓の病、ずっと前から解つてたんだ・・もう良くないって

「そんな・・・」

「シン君、ごめんね・・君が気にしなくとも僕はすぐに消えるからそれからキラは薬を飲まなくなつた。

時折苦笑しそうだけど、俺がいるときはいつも微笑んだ顔だった。心配で片時も離れたく無いのに・・。

「えー?どうして今!-?」

「オープに来て日も長い、ミネルバの修理はとっくに完了している。

君たちには本部で色々してもらつことは沢山あるんだよ」

「けど……」

「シン?」

「ルナ、ちょっと」

「シン・・本気なの?」

「ああ・・・こんなこと頼んで迷惑だらうナビ・・・ルナしか頼めないんだ」

そう言うとルナは一つ大きなため息をした後、以前のせばせばした女の表情になつてまかせろつと言つてくれた。

「キラさん、オープに帰ることになつたんだ」

「・・・」

「でも・・用が終わつたらすぐ帰つてくれるから」

「うん」

心のどこかではキラが止めるかと思つたが、いつもの様子で頷いただけだつた。

「・・・キ」

その時電気が消えて真つ暗になつた。

「停電?」

「・・それがブレーカーが落ちたのかな・・」

「じゃ俺見てくるよ・・キラさん?」

「あつ・・ううん、ブレーカーは一階の階段下だから・・・」

「わかつた」

シンが部屋から出でていくと、キラはさつき無意識でシンを掴んでしまった手を握りしめる。

「ダメなのに・・僕は・・」

「キラさん、やつぱりブレーカーみたいだつたよ」

「そつかありがとう、じゃシン君、明日早いでしょ？僕は一人で大丈夫だから」

その言い方はキラの口癖だった。何があつても大丈夫だつて・・。

「キラさん・・」

俺はキラにとつて重荷かもしけないと思つこともある。

「シン君？」

「キラさん・・キラと一緒にいたい・・」

そう言つて強く抱き締めると、キラも抱きしめかえしてくれた。だけど、俺が欲しいのはそれじゃない・・。

「行つてらつしゃい」

「うん・・」

「どうして！今回の帰還は一週間のはずだろ！？」

「何があつたかは知らないが、それでも言わなければ帰還しなかつたのはお前だろ？まだまだ状況が移り変わるなか、あの戦いで前线にいたお前にはしてもらうことは沢山ある」

「クソ！離せ！！」

一週間で戻れるつて約束したのに！

「キラ・・・」

「キラ、具合はどうだ？」

「カガリ・・忙しいのに」

ベットから起き上がるうとするときガリがやんわりと制止する。

「寝たままでいいよ、今日は私が作つたパイを持ってきた」

「カガリが作つたの？」

「私が作つては变か？つと言つても私が作れるのはこれだけで・・母様の得意で父様が好きだつたんだ」

「そう・・・」

「あつお茶入れてくるな」

カガリが部屋を出ると、パイを机に置いつと立ち上がると・・・」

ホ・・ゴホ!。

「キラ!..」

カガリの声が遠くで聞こえたと思いつと同時に僕の意識は途切れた。

「カガリ」

「今は落ち着いている」

「キラ・・・」

>>>Next

(7) 白い花

みんなの声が聞こえる・・・どうして悲しそうなんだろ。

僕が・・いるから・・?

僕が生きてるから・・?

閉じ込められてどれ位の時間が経つたんだ?
キラはどうしてるんだ・・・。

「キラ・・」

「貴方はこんな所で何をしてるんです?」

急に扉が開いたと思うとそこに立っていたのはラクス・クライン。
「キラが呼んでます・・貴方はどうなんですか?」

「・・・え?」

「貴方はキラに会いたいですか?」

そんなの答えは決まってる。

「会いたい!・」

「アスラン、あとは私が・・」

ラクスがそう言つと後ろからアスランが現れた。一瞬俺はどう対応
していいのか解らなかつたが、アスランはいつも通り俺に話しかけ
た。

「すまない、シン」つちだ!急ぐぞ」

「・・はい!」

「あの人は・・キラが選んだ方ですから・・
2人の後姿を見ながらラクスは一言呟いた。

「」の船はオープ行きだ、向こうでカガリが待つてゐる・・キラを頼む

「アスラン・・・」

アスランは俺の言葉を聞かずに扉を閉める、俺が言いたいことは解つていると言つた表情で・・。

「キラ！・・・

複数の管に繋がれ、浅い呼吸を繰り返すキラがいた。

「キラ！帰つてきたよ！約束より・・遅れちゃつたけど・・」

「・・・シンく・・ん？」

透き通るほど色白い肌に浅い呼吸のなかキラが薄く目を開ける。

「・・夢？」

「ううん、ほんとだよ・・ただいま」

初めて見た・・キラが涙を流すのを・・。腕に抱きしめたキラが小さく言葉を漏らす。誰にもいえない心に閉じ込めたキラの想い。

「キラ、好きだよ・・愛してる」

キラからの言葉は無かつたけれど、一番の笑顔だった。

それから数日キラは生きた。

アスラン達もキラに会いたいハズなのにほとんどの時間を俺達2人にくれた。

昔話や他愛もない話をしたり、キラがベットから起き上がる事ができる時は車いすに乗つて海岸へ散歩に行つたり・・それだけで楽しかった。

「ほんとはキラにとつて俺の存在は辛いだけなかつて何度も思つ

たよ、死んだ方がいいんじゃないかって……

小さく呟いたハズの独り言はキラに聞こえていたようで、キラは静かに目を開ける。

「最初は君を見ると戦争で殺した人達が責めているようで怖かった。けど、今は君がいてくれて本当に良かつたと思つてゐる」

「キラ・・・

「腕・・傷残つてるでしょ？『ごめん』

前にナイフでキラに刺された腕の傷は深くは無かつたけれど傷跡が残つていた。

「傷もキラに付けられたと思ったら嬉しいよ・・ってこれは変か」以前は触れもしなかつた戦争の話しも、こうじう風にいつか痛みは残つても話しができればきっとキラの心に光が当たることもできるはず。

ある月が淡い雲に覆われた少し薄暗い夜、キラの呼吸は今にも止まりそつで・・・このまま眠るように逝つてしまふのかと・・・俺は涙をこぼさないよう窓の方へ視線を向けた時だった。

「キラー・キラー！…見て！…」

キラは重い瞼をゆっくり開いて、俺は窓を指さすと・・・桜が満開に咲いていた。

俺はキラの体を労わりながら車いすに乗せて、屋敷から出て木の傍まで連れて行く。

わづきまで雲で隠されていた月が現れ、月夜に照らされた桜は・・。

「綺麗だね・・・・

「うん、約束・・叶つた」

「・・・シン

「ん？」

「好き、ずっと好きだった……すごく僕は……」

キラの葬儀にはたくさん的人が集まってくれて、誰もがキラの死を悼んでいた。

キラはこんなにたくさんの人のために戦つたんだって……。

「これからどうするんだ?」

「俺は……ザフトに戻るよ。それで一人でも戦う……この平和が少しでも、うつむく・・・ずっと続くように……」

『僕は・・・しあわせだつたよ』

「一人でも花を植え続けるよ・・・」

「一人ではないだろ?」

「そうですわ、私達が共に」

「キラもな・・・」

「・・・・・はい」

たとえ何度も枯れても・・・僕は花を植え続ける。

それが俺たちの戦いなのだから・・・。

>>>END

(7) 白い花(後書き)

「白い花」これで完結です。

ハッピーハンドがりょくは好きですが、たまにこういった切ない感じのストーリーはどうでしょうか?

シンキラ最高www(笑)

感想等お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1192o/>

白い花

2011年1月4日03時21分発行